

特別レポート 10%の時短が生む30%の心の余裕 音声AIツールで変わる診療現場

人工知能（AI）が診療の現場を変えようとしている――。令和8年度診療報酬改定では、医療DXやICTの活用で施設基準を緩和するような個別改定項目が盛り込まれ、DX導入の後押しとなることが期待される。AIの活用で変わる医療の現場を追った。

■音声AIのカタナシを導入

大阪府吹田市にある社会医療法人愛仁会（高岡秀幸理事長）が運営する井上病院（辻本吉広院長）では、令和8年1月に音声AIツール「カタナシ」を導入した。旗振り役となったのが、令和6年4月に新設した総合内科の部長である濱田治医師だ。

総合内科では複数の可能性から診断をつけるため、丁寧な問診をすることが重要だ。また、同院で

は600〜700人の透析患者が通院している。透析患者と治療の意思決定をするための対話が、1時間に及ぶこともあり、医師や看護師、臨床工学技士は膨大な記録業務に追われていた。

こうした病院全体の記録業務の多さを解消するため、音声AIツールの導入に踏み切った。

カタナシは会話を文字に起こし、SOAP（S＝主観的情報、O＝客観的情報、A＝評価、P＝計画）形式などに自動で要約する。カタナシは、診察室で患者を前に、問診などをしながらカタカタとパソコンのキーボードをたたいた音である「カタカタ」をなくすという意味で命名された。

濱田医師によると、カルテ入力にかかる時間の削減幅は10%程度だが、心理的負担は30%ほど軽減



若手医師と話す濱田医師

したという。音声AIツールが診療記録を自動生成する間に、検査オーダーの発行や次の診察の準備ができるようになった。午前中の診察が早く終わるようになり、疲労感が劇的に改善した。

また、患者の目を見て診察をできるようになったという実感のみならず、患者からの「とても丁寧な先生だ」という声も増えた。

■多国籍診療や教育での活用も

音声AIツールの真価は、言語の壁を乗り越えるためや教育の場でもそれぞれ発揮されている。

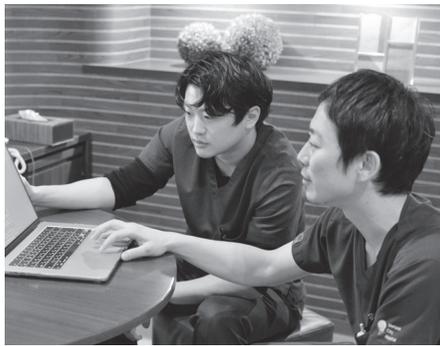
総合内科で日本語を話せない中国籍の患者を診察することがあつ

た。同行した通訳を介し問診をした内容と音声AIツールが聞き取った中国語の内容を照合した結果、患者の意図を汲み取れていることがわかり、濱田医師は「互いがわかり合えていたことを確認できた。医師として最高の体験だ」と振り返った。

また指導医の下で実臨床を学ぶ実習であるクリニカル・クラークシップとして、今年の1月から大阪大学の医学生2人を受け入れている。模擬診療で医学生の問診内容と音声AIツールが出力する診療記録を比較することで、診断プロセスの学習に役立てている。今後は、ベッドサイド研修で学生に音声AIツールを持たせ、指導医がすぐにフィードバックをできない状況でも問診内容の確からしさを学生自身が振り返ることができるよう、活用を進めていく方針だ。

■若手医師がAI導入を推進

東京都板橋区にあるIMSグループ医療法人社団明芳会（中村哲也理事長）が運営する板橋中央総合病院（加藤良太郎院長）では、令和7年11月から救急総合診療科



音声AIツールの画面を見る全医師(左)、安本医師

で音声AIツールを活用している。同科の診療部長である安本有佑医師は、音声AIツール導入のプロジェクトリーダーを30歳の若手医師である全剛史医師に任せることにした。

安本医師は「全先生に任せたとが導入成功のカギだった」と振り返る。全医師は、チーフレジデントと呼ばれる若手医師をまとめる役割も担う。AIなどの最新技術に関心をもち、進んで活用することができ、なおかつうまく人と関わることができる人材だったため、安心して任せることができたという。

全医師は、まず自分が音声AIツールを使ってみて感じた可能性

を科内で共有し、利用を促した。

チームメンバーが患者や家族への病状説明(IC)の記録などに大幅な時間を取られている現状を目の当たりにし、なんとか解決したいという思いがあった。「効率よくできることがわかった以上、無駄は省きたい。そんなシンプルなモチベーションだった」と振り返る。安本医師は「繰り返し言わないと人を動かすことはできない。周りにとにかくしつこく働きかけてくれた」と全医師を労う。

■すべての記録を音声AIツールで

同院では、記録を残したいさまざまな場面で音声AIツールを活用している。音声AIツールが会話を文字に起こし、SOAP形式などに自動で要約し、二次元コーディングで読み取ることによってに反映することができる。

医師一人あたり、平均20〜30分のICを一日1〜2件実施している。これまでは会話の記録に30分ほどかかっていた上、途中で他の業務が舞い込む間に内容を忘れてしまうこともあった。音声AIツール

を活用することで、自動生成された記録を5分ほど修正することで作成できるようになり、週2〜3時間の業務削減につながった。また、救急搬送要請があった時に音声AIツールを起動し、救急隊からの連絡を記録する試みも始める予定である。

それによって、搬送時には、救急隊の情報が記録されているだけでなく、救急隊の院内滞在時間を短縮することも期待される。転院搬送となる場合も音声AIツールが役立つという。転院先への相談内容を音声AIツールで記録し、診療情報提供書モードに切り替えることで、速やかに文書を作成し申し送りを行うことができる。

今後は、若手の医師が多い診療科、職員の多い看護部や、電話対応の多い地域連携室・医療相談室での活用も目指す。地域連携室や医療相談室では、電話でのやり取りが記録に残っていないことが多いと、トラブルのもとになりやすいという。電話でメールアドレスを聞き出して、文章に残すこともある。

音声AIツールを活用することで会話の内容をカルテに記録でき

れば、こういった業務時間を削減することが期待される。安本医師は「どの病院でも人材不足が深刻だ。ツールに任せられる部分は任せていきたい」と、さらなる活用の構想を練っている。

■無理強いないリーダーシップ

神奈川県相模原市にある医療法人社団守成会(廣瀬憲一理事長)が運営する広瀬病院(河野悟院長)では、令和7年3月から音声AIツールを活用している。

同院では当初、病棟看護師の残業が常態化し、特に一日あたり1時間ほどかかっていた記録業務の時間削減が課題となっていた。全職員にスマートフォン(スマホ)を支給していたことから、スマホで利用できる音声AIツールを導入することで課題解決を図った。

しかし、看護部での導入は一筋縄ではいかなかった。看護師の多くがタイピングに慣れており、ボイスメモ活用への抵抗感があったという。そこで、活用を無理強いせず、いつでも使える状態にして個人の判断に任せることにした。すると、特に療養病床での看護記

録での活用が進み、当初30分程度あった残業時間がほぼなくなった。同院で音声A Iツールの活用が最も進んでいるのが外来診療だ。内科ではすべての診察で活用しており、廣瀬理事長自身も日々の診療で活用する。時間効率として15〜20%ほど上がり、同じ時間枠で診察できる患者数が10名ほど増えたという。特に生活習慣病の指導記録など、義務化されている記録が自動化されることで、診療そのものに集中できるようになった。

■時間をかけ現場での定着を検証

音声A Iツールの導入を検討する際、実は現場からは他製品を導



音声A Iツールの画面を見る廣瀬理事長

入したいとの声が上がりに、廣瀬理事長は両ツールの試験的な導入を決めた。ツールを自由に体験・比較できる環境を整え、全職員が「まずは使ってみる」ことを最優先にした。この時も無理に使わせることはせず、検証にじっくり時間をかけた。音声A Iツールの活用が進むと、多くの職員が見る電子カルテの記録を通じ、詳細な記録が素早く残されているということが職員間で共有されていった。

廣瀬理事長は「こんなにすごい、を多くの職員が体験し、利便性に気づくのを待った」と振り返る。今後は、看護部での活用頻度の向上を目指す。また、眼科や整形外科のように会話ではなく視覚的な所見が重要となる診療科での活用方法を模索する方針だ。

音声A Iツールは単なる時短ツールにとどまらず、医療の質を担保し、職員の心身の余裕を生み出すための心強いパートナーとなり得る。病院全体を巻き込む組織横断的なプロジェクトが、ツールをうまく活用するカギとなるだろう。

(えむでぶ倶楽部ニュース編集部)

汲田玲未衣

医科診療報酬点数表

令和8年6月版 4月上旬発刊予定 定価 本体3,100円+税10%(税込3,410円) / B5判2色 約1,100頁

本文2色による構成、改定による変更箇所には下線を表示
使いやすさ抜群の『医科点数表 実務書』の決定版
独自の編集によるフルカラーの早見表や別紙様式も掲載



株式
会社

社会保険研究所

〒101-8522

東京都千代田区内神田 2-15-9 The Kanda 282
☎ (03)3252-7901 FAX (03)3252-7977